

コラージュ継続制作による制作者のイメージの自律性と表現の変化

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
福山 かおる

本研究の目的は、(1) コラージュ制作を通して制作者の中に現れてきた自律的なイメージが画用紙上でどのように現れるか(2) コラージュ制作における自律的なイメージがどのように、どんな過程で現れるかの2点を明らかにすることである。

研究方法としては、大学生9名(男性2名、女性7名)に対し、継続して5回のコラージュ制作を実施し、自律的なイメージやイメージの画用紙上への現れ方などに関して半構造化面接によって調査し、言語データを得た。

研究1では、(1)の目的を明らかにするため、5名の大学生の言語データを質的に分析した。研究2では、(2)の目的を明らかにするため、研究1で取り上げた5名のうちの1名を対象に、5回のコラージュ継続制作を通しての事例的研究を行った。

研究1の質的分析では、37のコードと6のカテゴリーが生成され、以下の3点が明らかになった。1つ目は、コラージュ制作の中で思い浮かんだ自律的なイメージを制作者が表現する場合としない場合があることである。さらに表現する場合は、イメージをそのまま画用紙上に表現することもあるれば、イメージに見合う素材の選択、切り抜き方の工夫、貼り方の工夫といった意識的な介入を経て表現する場合もある。2点目として、イメージをそのまま画用紙上に表現する場合も、思い浮かんだ自律的なイメージを表現しようという意識的な制作意図が働くと考えられ、イメージの自律性だけが純粹に現れることは少ないことが示唆された。3点目として、自律的なイメージは、雑誌を見る際、素材を選択する際、素材を切り抜く際、素材を貼る際、制作後にコラージュ作品を見た後、など様々な場面で見られることが明らかとなった。

研究2の事例的研究では、自律的なイメージが、制作者の意識の及ばない範囲で動いていることや意識のできる範囲で思い浮かぶこと、さらには、制作中に瞬時に思い浮かんで後からわからなくなるといった様相を呈することが明らかとなった。そして、自律的なイメージが現れる具体的な過程を示した。

研究1と研究2より、自律的なイメージは制作前、制作中、制作後など様々な過程で現れ、制作者の意識の及ばない範囲や明確に把握できる形といった様相で動くものであることがわかった。そして、自律的なイメージを制作者自身が、意識していなければ、制作者がよくわからないという感じを抱いて画用紙上に表現され(あるいはされず)、把握していれば制作意図を伴って表現されると示唆された。

本研究の結果は、調査的な研究という枠内で見られたことであり、非言語的な自律的なイメージの現れる過程や様相、画用紙上への現れ方を言語的に捉えようとする点に限界がある。だが、コラージュ制作過程で自律的なイメージが次々と喚起されて作品が構成されていく点は、コラージュ療法による治療の進展において重要な役割を果たすと考える。